

歯車

学校だより

河北町立西里小学校

令和二年十月三十一日

残る言葉

校長 舩山 聡

この秋、安全確保の理由で根際地区の通学路を変更しました。根際地区から国道287号線の横断歩道を渡った後、西里学童クラブの裏道を通らず、改善センター前の歩道を通って学校へ登校するように変更しました。この横断歩道の所は、前から交通事故が心配されている場所でした。保護者、根際地区長様や交通指導員様、河北町教育委員会へ事前に通学路変更の連絡をしました。根際地区の子ども達には、九日（金）の朝、通学路の変更を伝えました。

「おはようございます。来週から安全に登校できるように、コンビニの横断歩道を渡り、改善センター前の歩道を通って、学校の東口から登校することにします。車に気をつけて登校してください。」

通学班は二つあり、それぞれの班長さんは「はい。」と返事して、大丈夫！という顔を見せてくれました。

それだけのことなのですが、班長に声がけした時、何気ない子どもの小さなつぶやきが聞こえました。「さみしいね。」

その時は、さして気にも留めなかったのですが、中島、治部橋、両所の通学班の子ども達が通り過ぎ、全員が通過したことを確認して学校に戻る時、ふと、あのつぶやきが心に残っていました。

「さみしいね。」

なんだったのだろう、と思いました。

朝の登校の見守りは、あいさつ運動や交通安全のためでもあります。が、本当の意味は、子どもの様子を見るためにあります。私が立っている北口を通らない天満地区の子ども達はそのまます学校へ行きます。また、東口から登校する白山堂、下槇、塩之渕、造山地区の子ども達の様子も見られませんが、常時、安達交通指導員さん、庄司交通指導員さんがおられるので、安心していきます。（北口も、冬期間と新学期の四月に、交通指導員さんに立っていただいております。）

涙を見せながら登校する子どももいました。通学班のみんなに見守られて、がんばって登校してきました。家の人と一緒に遠くから歩いて来ることもありました。月日が過ぎて、成長した子どもの姿があります。

班長さんは、速く歩けば後ろがついてこないし、遅く歩けば学校に遅れるし、気を遣いながら先頭を歩きます。話に夢中になってついてこない低学年の子どもを気にしながら歩く姿もありました。

子どもの様子は、実に様々です。私があいさつをしても、あいさつが返ってこない時は、どうしたのかなと心配になります。朝寝坊して、ご飯を食べそこねたかな。班員の姿が見えない時、班長さんに「どうした？」と聞くと、「風邪をひいたそうです。」と教えてくれます。道の途中で拾った乾電池を手渡してくれた子どももいました。途中ですごい蜂の巣を見つけたと教えられ、殺虫剤を握って走ったことも二、三度ありました。

朝とはいえ、子どもにはドラマがあります。日々成長する子ども達です。通学路が変わり、根際地区の子ども達とあいさつをする機会はなくなりました。いつもの風景から子ども達の姿がなくなったことで、さみしさの意味を感じています。

